

〈研究レポート〉

「女はらから」と「はい（本意）にはあらで」の解釈をめぐって
 — 『源氏物語』より 『伊勢物語』を照らして —

糸井 久

『伊勢物語』が『源氏物語』に多大の影響を与えたことは、よく知られている。小論では、それを逆に用いて、『源氏物語』から『伊勢物語』を照らし、この物語の諸説あつて定まらない二つの語句の解釈を試みる。

一、「女はらから」（初段）

『伊勢物語』は、主人公〈男〉の元服に始まり死を目前とするまでの一生を、和歌を中心として物語っている。初段で〈男〉が元服後初めて出会った恋の相手は、
 むかし、おとこ、うるかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このおとこ、かいまみてけり。

おもほえず、古里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。
（後略注）

とあり、「女はらから」と語られている。

この「女はらから」については、「母を同じくする二人の姉妹」とする注釈書が大勢を占めている。しかし、私はいま見る〈男〉の眼差しは、一人のなまめいた女性にのみ注がれていると解して、「はらから」の原義（注三）とおり「〈男〉と母を同じくする妹（または姉）一人」だと考えている。（注四）

四〇年以上も昔のことだが、私はこの考えを『伊勢物語』の作者の内面（注四）という拙論で発表した。しかし、これはすでに発表され始めていた片桐洋一氏の『伊勢物語』の成立に関する諸論文を知らずに、作者を一人とし、その創作の内面を和歌と散文の関わりに探ろうとした、若書きの恥じ入る

ばかりの論文であったが、その時副次的に述べたのが「女はらから」同母妹(姉)一人」説である。

日本の古代文学に同母の兄妹(姉弟)の恋を語った例を求めると、『古事記』下巻に木梨之輕の太子と同母の美しい妹輕の大郎女(衣通王)との悲劇的な恋物語がある。允恭天皇の死後、二人は愛し合って哀切な歌謡を歌いかわした後捕えられ、太子は伊予道後の湯に流され、あとを追ってきた大郎女と共に自殺している。平安時代の長編物語『宇津保物語』

あて宮巻では、かねてからあて宮に懸想していた大勢の貴族たちの中に、同母の兄仲純もいて、あて宮が東宮に入内する日に突然倒れて失神し、意識のない内に歌を詠んであて宮の懷に投げ入れ、息絶えてしまっている。また『伊勢物語』や『平仲物語』の歌物語を模して、はるか後代に作られた『篁物語』には、異腹の兄妹の恋が扱われている。大学の衆の主人公は親が内侍にしたいと願ひ、漢籍の学習を依頼してきた異母の妹に恋心を抱き、遂に懷妊させてしまった。妹は母によって兄から引き離され、監禁され衰弱して死に、亡霊となって兄の許に通つて来ると語られている。

このように古代の近親相姦の恋物語は、必ず恋人たちの悲劇的な結末となっているのだ。

そうだとすると、「女はらから」が同母妹(姉)であるなら、なぜ『伊勢物語』は悲劇的な恋物語とならなかったのか。ところで、私は、前述の拙論で平安時代の貴族社会での結婚の慣習を前提として、同腹の兄妹(姉弟)の関係を次のように記した。

そこでは、男はまず相手の女性の噂を聞くことから恋をはじめ。幾度か人を介して歌や手紙の贈答があったのち、好運であれば、男は女に仕える女房の手引きで、目指す女の寢室に忍びこむことができる。男の側からも女の側からも顔をあわせたときはもうすべてが決っていた。それが貴族一般の男と女の出会いであり、結婚であった。そして結婚生活をつづけていくことによって、長い時間をかけて相手の具体的な人間を、ようやくたがい認識していくようになるのだ。

このように徹底して鎖された男女の仲らいで、若い男女が人生においてはじめて男というもの、女というものを、具体的な人間として実際におのれの眼によってみつめることができるのは、兄妹であり、姉弟であるよりほかになかったのである。タブーとして禁じられたものでありながら、異性を具体的な人間として総体的に認識することのできる、

最初の唯一の道であつたにちがいない。いうならば、閉鎖された男女の生活のなかで、生身の異性として近親者のみが認識しえたのである。それは必然的に死に値する不倫のものでありながら、他の異性を知るときとは全く異なつた道すじであつたのである。

この部分について、のちに故西郷信綱先生にお会いした時、「ほかはだめだが、あそこだけはかうよ」と言つてくださったことを、懐かしく思い出す。その頃西郷先生は、記紀の神話で最初に出現する人格神のイザナキノミコト、イザナミノミコトが、兄妹であり、近親相姦の結婚であるとされた衝撃的な論文「近親相姦と神話―イザナキ・イザナミのこと―」^(註七)の構想をお持ちだったのかもしれない。

「同母の姉妹二人」説をとる注釈書が圧倒的だが、異色な論は、小松英雄氏の『伊勢物語の表現を掘り起こす』^(註八)『あづまくだり』の起承転結である。小松氏は、『源氏物語』野分巻で、光源氏がかつて愛して死なせた夕顔の遺児を我が娘として六条院に住ませ、野分のまぎれに夕霧が彼女をかいま見、心を動かされる場面を引用されて、

女の御さま、げにはらからと言ふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど、思はむは、「などか心あやまりもせざら

む」と、おぼゆ。^(註七)

夕霧は、玉鬘とは兄妹でも異腹だから、恋をしても「心あやまり」ではないと、内心で弁解している場面である。氏はこれをふまえて「女はらから」は異母妹だとされ、

幼時に見知つていた異母妹が、初々しい上品な女性になつて、懐かしい奈良の京で、簡単に覗き見されるほど質素な家に住んでいるのを見て、「を」とこは、見るに見かねる気持ちになり、冷静な判断を失つてしまいました。(略)「はらから」に恋をしてはならないという制約的慣習を守りとおすのが我慢できないほどせない心境になつたということです。

と述べていられる。私は氏の論にはほぼ賛同するが、よりタブーの厳しい同母妹としてよいと考えている。

前に私は、初段を近親相姦の恋物語とするならば、なぜ『伊勢物語』は悲劇的な結末へ進まなかつたのかと疑問を呈した。その答えを初段と同じく〈男〉が同母の妹に恋心めいた歌を贈る四九段より考えている。

むかし、おとこ、妹のいとおかしげなりけるを見をりて、うら若み寝よげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思

と聞えけり。返し、

若草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひける哉
初段の〈男〉の歌は、心の惑乱を率直にかつ激情的に「女は
らから」に訴えていた。だが四九段の兄の歌は、美しく成長
した妹が他の男と契りを結ぶのは残念だと、抑えた婉曲な表
現となっている。

多くの注釈書は、妹が思いがけぬ兄の恋心の告白を知って、
兄への非難、嫌悪、拒否する心情を返歌に込めているとする
のであるが、片桐洋一氏は、逆に妹の内心の喜びを表現する
歌と解されて、注八

『冬のあいだ待ち望んだ初草のようなすばらしいお言葉を
どうして今おっしゃるのでしょうか。そんなお気持ちを知ら
ずに、私は心至らずに一人で恋に悩んでいたことでありま
すよ』と応じた歌だということになる。

と対立する解釈を示されている。

私が学生時代初めて手にした『伊勢物語』は、塗籠本の
『日本古典全書』注九で、校注者の南波浩氏が四九段の頭注に、
まあなんと思いがけない珍らしいお言葉ですこと、それほ
ど私をいとはしく思つてゐて下さつたとは思ひもせずに、
何心なくうちとけ甘えてをりましたわねえ。(略)ただ兄

妹として何心もなく接してゐた兄からはじめて自分を異性
として見た、愛慕の情のこもる言葉をきき、兄の愛情への、
おどろきと同時に感謝の感慨である。

と肯定した解釈を付していられて、それが私の記憶に残つて
いたから、片桐氏の説を奇矯な説とは思えなかった。むしろ
掛詞や縁語、序詞を多用した妹の返歌で、成長し年頃になつ
たごく親密な同腹の兄と妹の戯れの恋心めいた歌の掛け合い
となつていると理解していた。

『源氏物語』総角巻で、匂宮は美しく成長した同母の妹一
の宮を見て、『伊勢物語』四九段をふまえて自分を色好みの
〈男〉に擬し、

若草のねみむものとは思はねどむすばほれたるここちこ
そすれ

と歌いかけている。彼の歌に一の宮は「ことしもこそあれ、
うたてあやし、とおぼせば、ものものたまはず」と無視の態
度を見せている。匂宮はそれを当然のことと思ひながらも、
四九段の「うらなくものを、といひたる姫君もざれてにくく
おぼさる〈男女〉の仲の機微のわかるすてきな妹だと心憎くく
思つた」というのである。四九段の妹の歌は、匂宮の気持
ちから推すと、男女の情に通じた年頃の兄妹の親愛の情から

生まれた遣り取りで、戯れの交情だと理解できる。そして一の宮の生まじめな無視の態度に初段の「女はらから」を重ねることができらるだろう。彼女は兄の激情的な恋歌に返歌をしなかったのだ。〈男〉の初めての恋は激しかったが、実ることなく終わったのである。初段の禁忌の恋は、悲劇的な結末の恋物語へと進展しなかったのだ。

「身をえうなき物に思^{おもひ}なして、京にはあらじ」（九段）とい定め東へ下る前、〈男〉の都での恋の相手は、初段の同母妹を始めとして、すでに夫を通わせているらしい西の京の女（二段）であり、さらに権門の家で后がねとして大切に育てられていた斎娘（三、四、五、六段）だと、愛してはならぬ女を次々と愛し、成就しえぬ恋に身を委ねてきた。『伊勢物語』は、その堰かれた恋の頂点で、〈男〉が思いを歌に歌いあげるとして物語化したのである。

『源氏物語』で光源氏の初めての恋は、父帝が亡き母によく似た美しい愛妃を彼に引合わせたからで、亡母思慕に始まる彼の恋は、成就しえない近親相姦の恋に進えられる。これは『伊勢物語』初段の〈男〉の恋の反映だといえるだろう。

注一 『伊勢物語』の本文は、『新日本古典文学大系一七 竹取物

語 伊勢物語」（岩波書店 一九九七年刊）による。

注二 『岩波古語辞典』（岩波書店 一九七四年二月刊）「ハラは腹、カラは族、もと同母から生まれた血縁の者。後に父系的社会になったからか、同父異母の生れたという」とある。注三 『新日本古典文学大系』本では、「女はらから」の脚注で「姉妹。『はらから』は同腹の兄弟姉妹をいう。」とあり、他に「そこで美しい姉妹の姿を見て」とある。また鑑賞注にも「若紫」は姉妹の高貴な美しさを称揚している」と記している。『伊勢物語評解』（鈴木日出男著 筑摩書房二〇一三年六月刊）は、語注で「⑥女はらから 同母の姉妹」とし、評釈欄でも「その地で男の心を魅了したのは初々しくも美しい姉妹であった。自ら俗権から逃れて生きようとする男が、春の野を背景にしてこの若々しい姉妹へ、目くるめくような感動をおぼえたというのである。」と解している。また『伊勢物語全読解』（片桐洋一著 和泉書院 二〇一三年二月刊）でも、通釈で「その里にはたいそう魅力的な姉妹が住んでいたのである」とし、語釈の「いとなまめいたる女はらから」を、「軟派したくなるような姉妹」「色好みに走りたくなるほど魅力的な姉妹」としている。「同母の姉妹二人」説は、いまでも牢固とした力をもっているのだ。

「同母妹（姉）一人」説をとる論は、管見によると、益田勝実「フィクションの出現」（『日本文学の歴史 第三卷 宮廷サロンと才女』所収 角川書店 一九六七年七月刊）吉田達「伊勢物語」初段を考える―『をんなはらから』いもうと―論―（『平安文学研究』第六三輯 一九八〇年七月刊）後藤康文「室の八島」の背景―『狭衣物語』試論―（『国語と国文学』一九八七年七、八月号 東京大学国文学会刊）私はこの論文で、松永貞徳の伊勢伝授の書『伊勢物語奥旨秘訣』に、同母妹説のあることを知った。三谷邦明「奸計する伊勢物語―ジャンルの争闘あるいは古注的読みの復権―」（『日本文学』一九

九一年五月号 日本文学協会刊) などがある。

注四 『日本文学誌要』一八号(法政大学国文学会 一九六七年七月刊)

注五 初出は、雑誌『展望』一三九号(筑摩書房 一九七〇年七月刊) 後に『古事記研究』 未来社 一九七三年七月一〇日刊所収

注六 笠間書院(二〇一〇年刊)

注七 『源氏物語』の本文は、『新日本古典文学大系 源氏物語三』(岩波書店 一九九五年三月刊) による。

注八 『伊勢物語の新研究』第五編 伊勢物語解釈断章 第一章 うらなく物を思いけるかな―第四九段の解釈をめぐって―(明治書院 一九八七年刊)

注九 朝日新聞社(一九六〇年七月刊) なお補注で「表面やや好色のな匂いがするが、親しい兄妹の仲で、へだてなく冗談めいた言葉の中に、妹を愛し可愛く思ふ兄の情愛を汲みとるべきであらう。男の歌の表現が表現だけに、年若い女としてすぐに感謝の返歌をしたとるには、やや無理かと思はれるが、まあ、いやだわ」と言ひながらも、兄の愛情あふれる本意を知って、兄への信頼をも感じての返歌である。」とある。

二、「ほい(本意)にはあらで」(四段)

『伊勢物語』四段は、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身に
して

の名歌でよく知られた章段だが、本文中に解釈の定まらない

語句がある。

むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有けり。それを①本意にはあらで②心ざし深かりける人、③行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶憂しと思ひつつなんありける。(以下略)

「①本意にはあらで」をここで考えてみよう。多くの注釈書では、①が「②心ざしふかりける人」にかかるとして、二つの相反する語の整合に苦心してきた。例えば『新大系』本は、脚注①で「解釈は多岐にわたるが、思うに任せぬ有様で、と解しておく。周囲が許さぬ二人の仲なので願いどおりの逢瀬も叶わないのである。」とし、②を「深く思いを寄せていた人、業平と目される。」「③行きとぶらひける」を「しげしげと通うようになっていたところ」と注している。だが「願いどおりの逢瀬が叶わない」「男」が、「しげしげと通うようになっていた」ならば、「本意」を遂げたこととなり、「猶憂しと思ひつつなんありける」の「猶へさらにつついて」と矛盾することになるだろう。

問題は、「本意」の内容が本文に記されず、省略されて明

確ではないことである。『伊勢物語』には、二三段にも「本意」の語があり、筒井筒の恋が語られていて、幼馴染の少女が成長の後も親の望みに反して歌を交わし合って、「なごいひいひて、つるに本意のごとくあひにけり。」と恋を成就させている。この「本意」は、

大人になりにければ、おとも女も、恥ぢかはしてありけれど、おとはこの女をこそ得めと思ふ。女はこのおとこをと思ひつつ、親のあはすれども、きかでなんありける。

と前に記されているから明瞭である。^(注一)

それでは、四段の「本意」の内容は何か。私は塗籠本の本文「それを、ほいにはあらでゆきとぶらふ人、こころざしふかりけるを」を参考として、①が②を越えて、③「行きとぶらひけるを」にかかると考えた。すなはち「心ざし深かりける人、本意にはあらで、行きとぶらひけるを」となり、現代語訳すれば「(女に)愛情深く抱いていた(男)は、本来の気持ちからではなく、(女の許に)通っていた」となる。

そうだとすると、彼の「本意」とは、「正妻として女の家にもかえられ、共に暮らしたい」、または「女の家の子として世間に公に認められたい」と以前から思いつづけていたこと」になる。にもかかわらず、不本意ながら(男)は愛する

女の許に通いつづけなければならなかった。

平安時代の物語を読んでいて、省略されて書かれずにいることは、当時の人々にとっては当然のわかりきったことであり、書く必要がないから書かなかった。それが後の読者にはかえって難解となり、わからなくなったのだ。(男)が今は苦勞して女の家に通っているが、やがては女の家で婿として公認され、共に暮らしたいと念じていたということは、当時の男性には当然の心情であった。

『源氏物語』の中には后候補の斎娘として名門一族の将来の栄耀を担う役目を与えられながら、他の男性と恋に落ちた女性が二人いる。雲井雁と朧月夜尚侍である。

内大臣(頭中将)家の娘雲井雁と源氏の息夕霧は従姉弟どうしで、幼い頃共に祖母の手許で育てられ、親密な情愛をもちながら成長した。しかし、かつては信頼し合っていた二人の父が今は反目し権勢を争う中年の政治家となっていた。内大臣は、源氏の娘明石中宮と対抗して雲井雁を東宮に入内させようと企て二人を引き離す。そして長い忍耐の歳月の末に、親の和解によってようやく結ばれることとなる。

夕霧一八歳、雲井雁二〇歳の春、内大臣家藤花の宴に招かれた夕霧は、宴果てて後雲井雁の部屋に導かれ、六年間隔て

られていた二人の恋はようやく成就する。(藤裏葉)

(夕霧の長く耐えた)年月の積もりも、いとわりなくて悩ましきにもおぼえず」と酔ひにかこちて苦しげにもてなして、明るくも知らず顔なり。人々聞こえわずらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」と咎めたまふ。されど明かしはててぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔見るかひありかし。

夜も明けようとするのだが、夕霧は起きてこない。女房達はやきもきしている。内大臣家では内々に認めはしたものの夕霧をまだ自家の婿として公表したのではないから、一番鶏の鳴く前に帰ってくれなければ外聞が悪い。起きる気配のない夕霧に内大臣は、「したり顔の朝寝かなへしてやつたり顔の朝寝だな」と非難している。ようやく「明かしはてて」内大臣家を出ていく夕霧からいえば、まさに「本意を遂げた顔の朝寝」となるだろう。

もう一人の朧月夜尚侍と源氏の場合は、葵巻で葵上の死後源氏が彼女の許に密かに通っていることを知った右大臣家では、

今后は、御匣殿猶この大将にのみ心つけたまへるを、「げに、はた、かくやむごとなかりつる方も亡せ給ぬめるを、

さてもあらむに、なかくちおしからむ」などおとゝの給に、いとにくしと思ひきこえ給て、宮仕へもおさくしくだにしなし給へらば、なかあしからむ、とまいらせたまつらむことをおぼしげむ。^(注三)

女の父右大臣は、葵上の死後でもあるから、源氏が娘を正妻として迎えるなら結婚を認めようと言いつけている。だが源氏を憎む弘徽殿女御は、妹が源氏に心を寄せていることを承知しながら、東宮入内に固執し、父の提案を強く斥けてしまっている。

この場面によって『伊勢物語』三段から始まる二条の后物語群を照らしてみると、二条の后は、名門一族の繁栄を担う大事な后がねの娘として養育されており、〈男〉が密かに通ってくることは黙認しても(四段)、婿として公認しようとはしなかったのである。したがって〈男〉は女を愛する限り通い続けなければならない。

恋人の許に夜忍んで通う貴公子の姿は、一見ロマンチックで華やかに見えるが、牛車や馬を用いるにしても寒暑にかかわらず夜訪れ明けぬうちに帰らねばならぬし、さらに物忌み(方違え)も加わるとなれば、若い男性であっても相当の努力労力が必要であつたに違いない。女の家で公認されず、そ

れがいつ終るとも分からないとしたなら――。

女の家で「所願はし」をしてくれず「本意にはあらで」通いつづけた（男）は、女の入内が近づいたことを察知して、非常手段をとった。それが「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きにきけり。」（六段）である。彼には「津の国の郡芦屋の里にしろよし」（八七段）があるから、そこへ女を連れて行き、共に暮らそうと考えたのだろう。だが道の途中現れた鬼Ⅱ女の兄達によって奪い返され、彼の企ては挫折してしまうのだ。

注一 『伊勢物語』には「本意」が三か所あり、三九段「皇女の本意なし」には、私はまだよい解を得ていない。

注二 前章注九と同書である。

注三 『新日本古典文学大系 源氏物語一』（岩波書店 一九九三年一月二〇日刊）による。

（いとい・ひさし 成城国文学会員）